

2017年1月1日(日)

説教:「低みに立つ」

聖書:マルコによる福音書1章1～11節

今朝はイエス・キリストのバプテスマの出来事。何故イエスはバプテスマを受けたのであろうか？ここにイエスの宣教の視点がある。ここはマタイ、ルカに記すクリスマス物語の視点と重なる。

新共同訳聖書の翻訳者の一人、本田哲郎神父は、大阪釜ヶ崎で1989年から、日雇い労働者の方々と共に生活をし、カトリックの司祭として働いておられる。本田神父は、彼らと共に歩む中で、福音書の読み直しの必要を迫られている。その一つにバプテスマを「洗礼」と訳してしまったのは全くの間違いであったと言う。本田神父の著書『小さくされた人々のための福音書』の中に、これまで洗礼を受けることが「汚れを洗い清める」ことであるかのように誤解されてきた。そのため洗礼を受けた人は「清い人」、洗礼を受けていない人は「汚れた人」というような錯覚を多くのキリスト者に抱かせてきた。“バプテスマ”は本来、低みから、低みへと流れる水の水面下に全身を沈めて「低みから見直させる」ことであると解釈する。汚れを洗い流すというようないわゆる浄、不浄の問題とは関係のないことである。

イエスご自身がバプテスマを受けたヨルダン川は、地球上で最も低いところを流れている川。その谷底で、低みから低みへと流れる水の水面下に全身を沈められた。それは、最も低いところに身を沈め、最も低いところから、この世の荒れ野を見つめ直すということ。その主イエスの宣教は、確かにこの世の低みに落としめられた者たちと共にあって歩んで行かれた。主イエスは、「貧しい者は幸いなりに」と生きる希望を与えられた。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい」と慰めをくださった。罪人と陰口され、指を刺されていた「友無き者の友」となられた。「低みに立つ」あり方をこのバプテスマの出来事の中に込められたのではないかということである。

そのような主なる神の立ち位置に対して、この世は、低みに立つとは逆に、高みに立とうとする者が如何に多いことか。・・・しかし、私たちは常に、主イエスが、低みに立ってこの世の荒れ野を見つめ、宣教の業を始められたことを覚え、私たちもまた、この「低みに立つ」という視点を思い起こしながら、私たちに出来るところの業を、働きを、担わせて頂きたい。(神谷)